世界の視点をめぐる思想史的研究

研究代表者　栗　原　　隆

1．分担者

山　内　志　朗
城　戸　　淳
鈴　木　佳　秀

2．2006年度の研究活動の概要

6月25日㈰　人間学合宿（於，あすなろ荘）での研究発表
栗原隆「虚無への供物としての知
　　―― フィヒテのニヒリズムに対するヤコービの批判」(*)

7月8日㈯　空間論フォーラム「体験される空間と表象される空間」
　　（於，ＣＬＬＩＣ講義室）
矢萩喜従郎（デザイナー）「触媒としての空間と身体」
佐藤康邦（放送大学教授）「絵画空間と建築空間」
須田朗（中央大学教授）「わたしのいる空間 ―― ハイデガーの空間論」
野家伸也（東北工業大学教授）「絵画空間の現象学」

8月18日㈮　公開研究会「芸術の〈近代性〉を捉え直す」
　　（於，ＣＬＬＩＣ講義室）
栗原隆「Ｇ・Ｅ・シュルツェの懐疑論に見る〈近代性〉」(**)
細田あや子（新潟大学人文学部助教授）
「一五世紀のフランドル絵画 ―― 北方絵画における光と空気の描写」
岩城見一（国立京都近代美術館館長）
「感性論から美学へ ―― AEsthetikの意味変容 ――」

８月19日㈯
小田部胤久（東京大学大学院助教授）
「近代的理念としての『さすらい』
―― 一つのロマン主義的主題とその変奏」
尾崎彰宏（東北大学大学院教授）「17世紀オランダ美術に見る近代」

11月14日㈫ 「ヘーゲル・アーベント」兼「新潟大学哲学・人間学研究会」
（総合教育研究棟「人間学ＰＳ」）
栗原隆「ヘルダーの『神』ふたたび」(***)

12月２日㈯　フォーラム「空間と眼差し」（於，ＣＬＬＩＣ講義室）
鈴木光太郎（新潟大学人文学部教授）
「空間認知と眼差しをめぐる問題 ―― 実験心理学から空間の哲学を見る」
小熊正久（山形大学教授）「初期フッサールの空間論」
船木亨（専修大学教授）「感覚の空間性」
神崎繁（首都大学東京教授）「〈見え〉からの解放」

(*)　伊坂青司・原田哲史（編）『ドイツ・ロマン主義研究』（御茶の水書房，2007年１月）に所収された。
(**)　日本ヘーゲル学会刊『ヘーゲル哲学研究』12号（こぶし書房，2006年12月）に所収された。
(***) 中央公論新社刊『哲学の歴史』（2007年７月刊行予定）に「ヤコービとヘルダー」として収載される予定。

３．2006年度の研究成果の概要

本年度も前年度にも増して，多様かつ精力的な研究展開を行なった。機関誌である『知のトポス』は，学界から高く評価され，歓迎されていることから，今後とも，歴史の伏流として顧みられなくなった思想を発掘・紹介する作業を続けて行きたい。

研究会活動を活発に行い，知の拠点形成を図ったが，『知のトポス』並びに『芸術の始まる時，尽きる時』（東北大学出版会）刊行プロジェクトを通して，新潟大学での哲学研究が広く注目されてきていることは有り難いことである。ある意味では，ここ数年の研究活動の収斂するところが，『芸術の始まる時，尽きる時』（東北大学出版会）であったことは間違いない。

４．2006年度の研究成果の一覧

著書

単著：栗原隆『ドイツ観念論の歴史意識とヘーゲル』（知泉書館）
2006年３月，295＋５頁。

共編著：城戸淳（麻生博之との共編著)『哲学の問題群 —— もういちど考えてみること』（ナカニシヤ出版）2006年５月，全331頁。

このうち，

単独執筆：城戸淳「人間とその生」（５～25頁）

単独執筆：城戸淳「自由と行為」(81～117頁)

単独執筆：城戸淳「あとがき」(300～302頁)

共著：山内志朗『異界の交錯（下)』(細田あや子，渡辺和子編，リトン）
2006年12月，全482頁。

このうち，

単独執筆：山内志朗「中世の存在論と異界論の構図」(337～358頁)

共著：『ドイツ・ロマン派研究』(伊坂青司編：御茶の水書房）2007年１月，全574頁。

このうち，

単独執筆：栗原隆「虚無への供物としての知 —— フィヒテのニヒリズムに対するヤコービの批判」(354～375頁)

単著：山内志朗『〈つまずき〉のなかの哲学』（ＮＨＫ出版）2007年１月，全221頁。

編著：栗原隆『芸術の始まる時，尽きる時』（東北大学出版会）2007年３月，全458頁

このうち，

単独執筆：栗原隆「まえがき」（xiii～xv頁）

単独執筆：山内志朗「arsから芸術が分離する時」(129～145頁)

単独執筆：栗原隆「遊戯と精神」(239～242頁)

単独執筆：栗原隆「芸術が〈興味をそそる〉ものになった時」(295～328頁)

単独執筆：栗原隆「あとがき」(448～451頁)

単独執筆：城戸淳「カントの崇高論
—— 芸術終焉論の手前で／の後に」(373～399頁)

論文

単著：栗原隆「意識と無 —— シュルツェとドイツ観念論」（日本ヘーゲル学会編『ヘーゲル哲学研究』vol. 12，こぶし書房）2006年12月，124～138頁。

単著：山内志朗「ドゥンス・スコトゥスとイスラーム哲学——共通本性の系譜」（『大航海』2007年 2 月），94～103頁。

単著：山内志朗「修験道と湯殿山振興」（『理想』2007年 2 月），26～36頁。

単著：山内志朗「存在と強度に関する試論（その一）——西洋中世の存在論について」(新潟大学大学院現代社会文化研究科共同研究プロジェクト『知のトポス』Nr. 2 ）2007年 3 月，111～156頁。

その他

単著：栗原隆「スピノザからヘーゲルへ —— 実体から主体へ到る理路」（http://chikyuza.net/）2006年 9 月

単著：栗原隆「精神と歴史 —— ヘーゲルが残した『1803年の神話と芸術をめぐる草稿』についての註記」（『科学研究費補助金（基盤研究Ａ）「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究」(課題番号16202001）研究成果報告書』平成18年 3 月）13～26頁。

単著：城戸淳「カントの崇高論 —— 芸術終焉論の文脈のなかで」（『科学研究費補助金（基盤研究Ａ）「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な

意味についての研究」（課題番号16202001）研究成果報告書』平成18年３月）27〜38頁。

単著：栗原隆「精神と文字 —— 理解と解釈のよすが」（『科学研究費補助金（基盤研究Ａ）「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究」（課題番号16202001）研究成果報告書』平成18年３月）53〜66頁。

単著：城戸淳「カントの空間 —— 身体，開闢，感情」（『科学研究費補助金（基盤研究Ｂ）「思想表現媒体から捉え直される，人間にとっての『空間』構成の意義についての研究」（課題番号17320002）研究成果報告書』平成19年３月）11〜22頁。

単著：栗原隆「生きられる空間，もしくは世間という体」（『科学研究費補助金（基盤研究Ａ）「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究」（課題番号16202001）研究成果報告書』平成18年３月）51〜62頁。

単著：栗原隆「秋山郷を読む —— 景観美学への一試論」（『科学研究費補助金（基盤研究Ａ）「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究」（課題番号16202001）研究成果報告書』平成18年３月）89〜98頁。

単著：栗原隆「拍子とリズムと空間と（Takt, Rhythmus und Raum）」（『科学研究費補助金（基盤研究Ａ）「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究」（課題番号16202001）研究成果報告書』平成18年３月）115〜118頁。

翻訳：ヨハネス・デ・ツェラヤ「論理学入門」（山内志朗訳：新潟大学大学院現代社会文化研究科共同研究プロジェクト『知のトポス』Nr. １）2006年３月，211〜218頁。

翻訳：カント「デュースブルク草稿（1773〜75年）R 4674－4684（上）」（城戸淳訳：新潟大学大学院現代社会文化研究科共同研究プロジェクト『知のトポス』Nr. １）2006年３月，１〜22頁。

翻訳：Ｆ・Ｗ・Ｊ・シェリング「絶対的な同一性—体系，ならびにそれと最

近の（ラインホルト流の）二元論との関係について」（栗原隆訳:新潟大学大学院現代社会文化研究科共同研究プロジェクト『知のトポス』Nr. 1 ）2006年 3 月，23～131頁。

翻訳：フリードリヒ・アスト『哲学史綱要・緒論』（栗原隆訳：『科学研究費補助金（基盤研究Ａ）「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究」（課題番号16202001）研究成果報告書』平成18年 3 月）123～130頁。

翻訳：フリードリヒ・アスト『文法，解釈学そして批判の基本線（抄訳）』（栗原隆訳:『科学研究費補助金（基盤研究Ａ）「芸術終焉論の持つ歴史的な文脈と現代的な意味についての研究」（課題番号16202001）研究成果報告書』平成18年 3 月）131～146頁。

翻訳：カント「デュースブルク草稿（1773～75年）（下）」（城戸淳訳：新潟大学大学院現代社会文化研究科共同研究プロジェクト『知のトポス』Nr. 2 ）2007年 3 月，１～24頁。

翻訳：Ｇ・Ｅ・シュルツェ『エーネジデムス』（部分訳）（栗原隆訳：新潟大学大学院現代社会文化研究科共同研究プロジェクト『知のトポス』Nr. 2 ）2007年 3 月，25～84頁。

翻訳：Ｇ・Ｗ・Ｆ・ヘーゲル「芸術の哲学もしくは美学（1828年）・序論」（栗原隆訳:新潟大学大学院現代社会文化研究科共同研究プロジェクト『知のトポス』Nr. 2 ）2007年 3 月，85～109頁。